

「観光」分野に自らの専門知識を活かす 島根の観光資源を活かした特色ある教育

ポストコロナに向け、山陰の地域活性化に観光が果たす役割が期待される中、求められているのが人材の育成です。令和4年4月に新設した国際観光教育推進センターでは、島根の豊かな観光資源を活用した教育プログラムを実施し、観光×専門の学びを通じた新たな価値の創造を目指しています。増永二之センター長と、有限会社竹葉 代表取締役副社長で、観光・広報部門の大学アドバイザーも務める小幡美香氏に聞きました。



島根大学
国際観光教育推進センター長
増永 二之
大阪府生まれ。島根大学生物資源科学部環境共生科学科教授。青年海外協力隊として西アフリカで2年、研究などでインドネシアに2年滞在したほか、毎年数ヶ国で研究活動を行う。

島根大学学長
服部 泰直
長野県生まれ。島根大学総合理工学部長などを経て2015年4月から現職。専門は位相数学。松本県ヶ丘高校(長野県)時代はサッカー部で活躍し、国体出場経験もあり。

有限会社 竹葉
代表取締役副社長
小幡 美香
島根県生まれ。さぎの湯温泉旅館「竹葉」の3代目女将。島根の伝統芸能「どじょうすくい踊り」一字川流師範。名物女将「どじょうすくい女将」として、「しまね観光PR大使」も務める。

撮影協力：松江市長松江歴史館、喫茶きはる

Vol.53 CONTENTS

■留学生・留学体験紹介 09	■しまだい便り 21	企画・制作 株式会社メリット
■島根大学の研究・地域貢献事業紹介	■学生広報サポーター企画 23	デザイン 有限会社node
①教育学部 竹田 健二 教授 11	■サークル紹介 24	タイトルロゴデザイン 松陽印刷所デザイン室 森脇 祥吾
②生物資源科学部 塩月 孝博 教授 13	■島根大学支援基金より 25	
③戦略的研究推進センター 石垣 美歌 助教 15	■読者プレゼント 25	
■社会で活躍する卒業生 17		
■たたら通信 19		

表紙／松江城のお堀沿いを歩く服部学長、増永センター長、小幡氏。
※感染防止に努めた上で、マスクなしで撮影を行っています。

「観光」×「専門」で 学びに多様性を生む

服部泰直学長(以下「学長」) センターを設置する前に、以前から観光教育に注力している東洋大学国際観光学部の関係者に話を聞きに行きました。「観光産業に就職するのは卒業生の3割程度。観光産業のみを就職先として見据えない方が良いでしょう」と助言を頂きました。そこで、本学における観光教育の在り方を考えてみました。

題材です。学生の学びが専門分野に閉じこもるのではなく、活用されていくツールの一つとして観光を取り入れることができるとは、と考えたのです。学生の学びに実社会の観点から光を当てること、学びの多様性が広がります。

小幡美香氏(以下「小幡」) 20年の新型コロナ

ナウイルス感染症拡大以降、観光業界にとっては厳しい日々でしたが、最近ようやく世の中が動き出してきた気がします。学長の話にも「多様性」という言葉が出

門分野を切り口に観光を考えた、逆に観光の視点から専門分野を追究したりすることもできます。観光と



てきました。コロナ禍前との一番大きな違いは、さまざまな業界で、多様性を考え、多角化する動きが増えたことです。たとえば我々だと宿泊業に特化するだけでなく、業界や地域を超えた広い視点で物事を考え、トライすることで、新たな可能性を生んでいきました。まさにピンチはチャンスなのです。



現場での

「観光×専門」の

学びが、新たな

価値の創造を促す

増永二之氏

(以下「増永」)

私の専門は、観光ではなく土壌学。研究でこれまで30数カ国を訪れ、土壌を通して、農業や自然環境などの課題解決について考えてきました。各地の文化や風習は全く違い、アプローチの仕方にも変わります。現地状況を捉え、考え、接していく窓口のようなものが、私の場合は「土」でした。「観光はさまざまな分野との親和性が高い」との学長の言葉の通り、観光でも各自の専門が各地域のことを考える窓口となります。確かに、センターが目指すものは、今までの自分の経験とマッチすることに改めて気づかされました。



センターでは、「観光×専門」の学びを通じ、新たな価値の創造を促す教育プログラムの構築を目指しています。

国立大学で初めて観光学部ができた和歌山大学の観光学研究者を専任で招いたほか、各学部の教員らが多角的な視点で接し、学生らに学びを深めてもらいます。観光人材を育成するためのプログラムではありません。各学部や学科での専門の学びを深くし、現場との接点を考える「場」の提供が、

専門の学びと現場との接点を考える「場」を提供したい



センターの役割です。

学生をどんどん現場に連れ出して、さまざまなことを肌で感じてもらい、学びの意欲を引き出していきたいですね。

小幡 2022年は、観光教育プログラムの授業科目「観光実践」として既に2回、現地でワークショップを開くことができました。一つ目は、松江城での「まっえ若武者隊」体験です。実際に甲冑を身にまとい、観光客のおもてなしをする一方で、もてなす側の視線を実体験し、松江が求められているものを考えてもらうことがテーマでした。

二つ目は、一畑電車の運転体験を通して、地方鉄道の役割や観光への関わり、観光戦略などを考えました。一畑電車の総務部次長を講師に招いたセミナーの後のディスカッションでは、観光商品についてさまざまな企画や提案が飛び交いました。現場に向かうことでアイデアが豊かになったのだと思います。これが観

の中には、観光産業に強い興味を持つ人や、専門分野との新たな接点を見つめる人もいるかもしれません。そんな時に相談に応じられる場所でもあつてほしいですね。自由さが本学の観光教育の特色の一つかもしれません。

大学の教員は、既成の形にはまりがちです。小幡女将のような学外の人に積極的に関わってもらうことで、新しいものが生まれ、教員自身も学びを得られると思っています。

増永 観光に関する基礎的なことを学ぶコア科目に関しては、大学がしっかり伝えていきなさい。しかしさらに学びたいという意欲を持つ学生も少なくないはず。女将を始めとする

リアルな体験を通じて豊かな発想やアイデアを育てて



光実践の魅力ですね。

増永 島根には、国宝や世界遺産、ジオパークのほか、七つの日本遺産もあります。これほどの観光資源を持つ地域は全国的にも珍しく、活用しない手はありません。現地を訪れたことがない学生も多いので、ぜひ連れて行ってあげたいです。



観光教育を通じて学びの多様性を広げたい

外からの風を取り込み、開かれたセンターに

学長 観光教育の明確な方向性はまだ決まっていません。ただ、観光がテーマなので、まず講師陣自らが楽しむことが大事だと思います。その上で学生がそれぞれ得た学びや発想をフォローする。その核になるのがセンターです。学生

る学外の人材、県や市町村で観光事業を担当している方々にも協力してもらい、新たな交流を生み出せば、と考えています。

小幡 コロナ禍が明け始め、人と人のつながりがリアルにしやすいになりました。外部に開放された「センターや大学であることはとても大事だ」と思います。私は島根に縁あつて入学した学生にもつと島根の魅力を感じてもらいたいですね。松江の茶文化にせよ、安来のドジョウすくいにせよ、自ら体験することで海外の方々にもその高付加価値を感性豊かに伝えることができます。

学長 大学は学問領域の中に閉じこもりがちです。センターには、外からの風を大学の中にまで入れてほしいですね。島根ほど観光資源が豊かな地は珍しいです。学生たちには、観光が持つマインドを生かして、新たな発見を導き出してほしいです。